証言記録

沖縄住民虐殺

——日兵逆殺と米軍犯罪

佐木隆三

新人物往来社

証言記録

沖縄住民虐殺

――日兵逆殺と米軍犯罪

佐木隆三

新人物往来社

佐木　隆三（さき・りゅうぞう）
1937年朝鮮咸鏡北道に生まれる。4歳のとき内地引揚げ。福岡県立八幡中央高校卒，八幡製鉄所勤務。1963年『ジャンケンポン協定』により第3回新日本文学賞を受賞する。1964年八幡製鉄を退職し，文筆生活に入る。現在，日本文芸家協会会員，新日本文学会会員。
主要著書に，『ジャンケンポン協定』（晶文社刊），『大将とわたし』（講談社刊），『埋火の街で』（河出書房刊），『沖縄と私と娼婦』（合同出版社刊），『新鋭作家叢書・佐木隆三集』（河出書房刊），『年輪のない木』（講談社刊），『偉大なる祖国アメリカ』（河出書房刊）など。最新作は，直木賞受賞作・書きおろし長篇『復讐するは我にあり』（講談社刊）と，短篇集『梅雨の記憶』（立風書房刊）。

証言記録　**沖縄住民虐殺**——日兵逆殺と米軍犯罪
昭和51年2月15日　第1刷発行
著者——佐木　隆三
©1976

検印省略

発行者——菅　貞人　発行所——株式会社　新人物往来社
東京都千代田区丸の内3—3—1　新東京ビル
電話 03—212—3931　振替東京 6—151643
印刷所——三喜堂印刷所　製本所——若林製本
（定価はカバー・帯に表示してあります）

目次

沖縄玉砕と占領〈序〉
——〝慰霊の日〟（六月二十三日）と〝屈辱の日〟（四月二十八日）——

日本兵による虐殺の証言

I　真和志村の戦時住民虐殺

1　「日本兵が子どもを毒殺し、母親を慰安婦あつかいした」という親泊朝政さんの証言　31

2　〝食糧よこさぬ〟と沖縄人を撲殺した日本兵
——豊見山ヨネコさんの証言　43

3　スパイ呼ばわりを憤る宮城トヨさんと、沖縄戦で一族二十五人失った比嘉賀真さんの証言　46

4　竹ヤリで〈一人十殺一戦車〉の自殺戦法を強いられた長堂嘉正さんの証言　49

5　ことばまで奪われた沖縄と三つの虐殺を証言する知念栄章・新垣正達さん　54

II　南風原村と国頭郡の〝日兵逆殺〟

1　〈日兵逆殺〉の墓標が証言する
新垣弓太郎・タガ子夫妻のこと　68

2 赤子赤子といって天皇は沖縄に何をしたか
——仲間亀千代さんの証言 77
3 沖縄教育者の殉難と教え子三百人の死に方を
証言する大山朝常さん 87
4 日本兵による国頭郡の住民虐殺 97

III 久米島の敗戦後住民虐殺

1 〝米軍に意を通じた者〟として
虐殺された十名の島民 100
2 島民を艦砲射撃から救った仲村渠明勇さん一家が、
敗戦後斬殺された証言 109
3 敗戦後〝朝鮮人〟の名のもとに虐殺された
行商人一家の惨劇 115
4 処刑を司令した鹿山守備隊長を
捕虜収容所で詰問した久米島出身者たち 117
5 仲村渠明勇さん虐殺の真相を究明した遺族 121
6 渡嘉敷島（三百二十九人）と座間味島（五十二人）の
日本軍命令の集団自決 125
7 鹿山元隊長と『琉球新報』大阪支社・記者
との一問一答 128
8 具志川村議会の抗議と『琉球新報』投書欄の声 131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

IV　沖縄人の疏開・引揚げと混血児の苦悩
1　「髪の短い人はこわい」という話　137
2　学童疏開の引率教員・城間喜春さんの話　140
3　着のみ着のままで、郷土沖縄を失った疏開者・引揚者たちの証言　142
4　混血児の母・伊是名ノブコさんの過去　146
5　〃日琉混血児〃の苦悩を忘れた混血児問題　153
6　混成収容された収容所生活で変えられた沖縄人の〃血縁地縁〃　155
7　四人の混血児の母・金城春子さんの生き方　156

米兵による虐殺の証言
I　越来村の主婦誘拐殺害
1　犯人の米兵を公表しなかった奥間シゲコさん殺人事件　165
2　敗戦直後おきた越来村のおびただしい米軍犯罪　173
3　サンフランシスコ条約で売り渡された虐殺された奥間シゲコさんの生命　178

4 轢殺された奥間カマタさんの生命の値段
——一千六百二十二ドル八十セント 180
5 〝二学童轢殺事件〟で立ち上がった
兼城校長先生の証言 183

II 石川市の幼女誘拐殺害

1 沖縄民衆の怒りを初めて現地ジャーナリズムが
大胆に報道した〝由美子ちゃん事件〟の真相 196
2 住民の証言で逮捕された犯人・ハート軍曹
3 第二の〝由美子ちゃん事件〟の発生 201
4 米民政府の声明文と沖縄教職員会の要請文 203
5 犯人・ハート軍曹の処遇をめぐって
ライカム司令部での記者会見 205
6 沖縄人権擁護全住民大会の各代表の発言 207
7 「由美子のあと、被害者が減った様子もない」
という母親・安子さんの話 209

III 第二兵站基地内メイド殺害

1 CIDが隠蔽した渡慶次菊子さんの死因 212
2 遺族の「メイド殺害事件の捜査促進に関
する陳情書」 217

3　メイド殺害事件に関する「立法院行政法務委員会議録」　219
4　遺族になんの説明もないまま、容疑者が帰国し、迷宮入りした捜査　233

IV　宜野湾市ホステス殺害

1　殺された西原和子さんの同僚や目撃者の証言　234
2　容疑者・ボウズウェル伍長の逮捕と損害賠償請求　237
3　『琉球新報』の〝ドキュメント・軍法廷の九日間〟　241
4　一九七〇年十二月二十日、〝コザ暴動〟の背景　244
5　ベトナム帰還兵・ボウズウェル伍長の無罪判決　246
6　西原和子さんの生い立ちと終焉　254

あとがき　　裝丁／秋山法子

証言記録

沖縄住民虐殺——日兵逆殺と米軍犯罪

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

沖縄玉砕と占領〈序〉

――〝慰霊の日〟（六月二十三日）と〝屈辱の日〟（四月二十八日）――

一九六八（昭和四十三）年九月の琉球政府調査最終まとめによると、沖縄県民の戦争による死亡者は、次のとおりである。

軍人および軍属	二八、二二八人
その他の戦闘参加者	五五、二四六人
一般の住民	九四、七五四人

合計十七万八千二百二十八人の死者を出したことになるが、この数字は資料によってまちまちであり、正確なことはわからない。確認のしようがない、というべきだろうか。沖縄島最南端の喜屋武半島は、退却した日本軍が壊滅したどんづまりの地だが、最後の司令部が置かれた摩文仁村と、喜屋武村、真壁村の三つの村は廃村同様になり、一九四六（昭和二十一）年四月に自然合体で三和村として発足したものの、やがて糸満町（現在は糸満市）に吸収される。このあたり砲弾でことごとく掘りかえされ、一木一草残らなかったというが、戦後トマトを植えたら、死体が溶けて土が肥えているため人頭大の実をつけたという。この三つの村にかぎらず、戸籍台帳を焼失し、一家全滅はもとより、一族全滅すらみられるのだから、戦時死者を厳密に確認することは不可能にちがいない。

沖縄朝日新聞社編『沖縄大観』（日本通信社刊）によれば、一九四四（昭和十九）年十二月三十一日現在の沖縄県人口は、次のようなものだった。

総人口　五九〇、四八〇人（四九二、一二八人）
男　二六五、五三〇人（二一九、七八六人）
女　三四二、九五〇人（二七二、三四二人）

カッコ内の数字は、沖縄本島（周辺の島をふくむ）の人口である。県外疎開は、この年七月七日の緊急閣議で決められ、中旬には第一船が出ている。この疎開は翌年三月まで続いて、約六万人が沖縄本島から九州へ移った（宮古、八重山群島からは約三万人が台湾へ疎開している）。四四年十二月三十一日調査の人口統計は、この疎開の最中だったから、〝沖縄決戦〟のとき残っていた住民がどれくらいだったか、正確な数字はわからない。しかし県外疎開は大半が四四年中に終わり、翌四五年には島内疎開（南部住民の北部移動）に重点がおかれているから、いちおう、統計にある約四十九万人が〝決戦〟の戦場にいたと考えていいのではないか。

そして、人口の三分の一以上になる、約十八万人が死んだ。

日本軍（沖縄出身者を除く）の死者は、六万五千九百八人だった。捕虜になったのが約七千四百人というから、生き残ったものわずか一割にすぎない、まさに玉砕戦である。

米軍の戦死者は、一万二千五百二十人というから、以上の数字を足してみると、死者は二十五万六千六百五十六人になる。沖縄タイムス編『鉄の暴風』の表現を借りれば、「前線も銃後もなかった沖縄戦は、残酷な近代戦が、最も圧縮されたかたちにおいて行われた唯一の実例」なのであり、米軍陸軍省編『日米最後の戦闘』（サイマル出版会刊）の訳者（外間正四郎）が「まえがき」で、「ベトナム戦争で米軍派兵五十万といわれたが、南ベトナムの百三十分の一の面積しかない沖縄島に、四十五万の大軍

が押し寄せてきたことを考えれば、沖縄戦がいかに熾烈なものであったか、容易に想像できよう」と、指摘するとおりである。

大城立裕著『沖縄』（現代教養文庫、社会思想社刊）では、沖縄戦の特異性が次のように分析されている。

① 日米という大国どうしの戦いが、沖縄という独特な歴史をもつ島でおこなわれ、その島を完全に喰いつぶしたこと。

② 島の住民にとっては、自分を守ることがそのまま国を守ることでありながら、戦後になってその祖国から裏切られたという感情をもつようになった、その根になる生活事件のかずかずが、その戦争のなかで起った、ということ。

③ いわば日米沖という三者の文化パターン間の三つ巴のたたかいが、その場で演じられたということ。

日米沖の三つ巴の戦いとは、にわかに理解しがたい表現であるけれども、文化パターンの問題としてとらえるとき、なまなましいリアリティをもってくる。たとえば46ページに出てくる証言者、司令部付の軍馬手だった知念栄章さんが首里城の地下壕でみたという「軍回報」の「今後、沖縄語で会話する者は、すべてスパイとみなし、厳重処分に処す」が象徴するように、日本軍は沖縄県民から言語まで奪わねばこの戦争が継続できなかったのである。

沖縄県で徴兵が実施されたのは一八九八（明治三十一）年になってからで、本土に遅れること二十五年である。徴兵令は一月一日公布され、七月に適齢者の検査があり、合格者は十二月一日に入営した。配属されたのは小倉歩兵第十四連隊と、大分歩兵第四十七連隊だった。初めのうち沖縄出身者は、歩

兵科だけに編入され、騎兵、砲兵、工兵など特別科に加えるようになったのは、一九〇七（明治四十）年以降だった。徴兵の沖縄出身者にとって、初めての戦争は日露戦争（一九〇四―五〈明治三十七―三十八〉年）である。第六師団、第十二師団に配属された約二千人のうち、二百五人が戦死した。この戦争が終わったとき『琉球新報』「社説」は、「祖国のために砲弾烟雨の中白刃の下を潜りて以て兵役の任務を全うしたるもの、我沖縄県下開創以来初めて見るところの壮挙偉烈の一なり。しかもその征戦の地に在る当時の諸君の一挙一動は、じつに我日本帝国の同胞が注視おかざるところのものにてありき。されば上は帝国の高官有司より下は我々県民に至るまで、諸君が天晴武勇をほしいままにしたるを賞讃す。これ、一は祖国のためにかくの如き勇強の人民あるを知らしめ、一は我が県民およびその曾祖に対し範をたれたり」と書いた。

この社説は、われわれに何を物語っているのだろうか。それは、沖縄出身の兵士は、戦場へ出たばあい他府県出身の兵士とは、異なった使命感を負わされていたということである。彼らは「身を以って国に殉ずる」ことにより、沖縄には「祖国のためにかくの如き忠勇の人民あり」ということを、日本全国の人びとに知らされる責任をになわされていたものである。沖縄人は他府県人にいかなる点でもけっして劣るものではないということを、「身を以って証ししなければならない」というのが、新聞論調がくり返し強調し、指導者がやっきとなって説いたことであったのだ。その結果、日露戦役から第二次大戦にかけて、沖縄の青年たちは、必要以上に危険な状況に身を挺し、いともたやすく生命を犠牲にしてきたのである（大田昌秀『沖縄の民衆意識』弘文堂刊。傍点は原文）。

沖縄県には、軍役所としての連隊区司令部がおかれて、一九一九（大正八）年五月から第六師団の管轄下にあった。これは徴兵などの連絡事務をとるにすぎず、軍配備がなされたのは、一九四一（昭和十

六）年七月に出された臨時要塞建設命令で、沖縄島東海岸の中城湾と、八重山群島西表島の船浮に建設された要塞の重砲兵連隊が最初である。

一九四四年三月二十二日、大本営直轄として南西諸島担当の、第三十二軍が創設された。この際、参謀総長による〈十号作戦準備要綱〉が指示され、方針の要旨は「皇土防衛及び南方圏との交通確保等のため、作戦準備を強化して敵の奇襲に備えるとともに、情勢の変転によって敵の攻略企図を撃砕し得る態勢を整えるもので、航空作戦準備を最重点とする」というものだった。

したがって作戦軍たる第三十二軍の最初の仕事は、飛行場の建設、拡張であり、六月上旬から独立混成第四十四旅団（九州で編成）、同第四十五旅団（四国で編成）などが送りこまれてきた。しかし六月二十九日朝、これらの要員四千六百人を乗せた「富山丸」が徳之島沖で沈められ、救助されたものわずか七百人という大損害が生じた。これによって飛行場設営には、沖縄住民を大量に動員、徹底して酷使することになる。

六月十五日、米軍はサイパン島に上陸し、七月五日に「われら玉砕もって太平洋の防波堤たらんとす」の訣別電報を打った守備隊は、七月七日に壊滅した。東条内閣が緊急閣議をひらいて沖縄県民の疎開命令を出したのは、サイパン陥落の七月七日夜のことだった。サイパン島の日本人住民約二万二千人の八割は沖縄県出身者だけに、この玉砕は沖縄の人びとに衝撃を与える。そして東条内閣は、七月十八日総辞職する。

大本営直轄として創設された第三十二軍は、「皇土ノ防衛ヲ強化」するために五月五日付で、西部軍に編入された。第三十二軍はそれを不満とし、七月六日に大本営直轄を希望するとして、「要地防空を主とする防衛総司令部系統と、敵の主攻を予期し地上決戦を企図する軍とはその性格が著しく相違す

る」という参謀長による電報を打った。しかし七月十一日、大本営は第三十二軍を台湾軍に編入した。理由は、①台湾、上海、南西諸島の三角圏の航空作戦の実施を容易にし、②第三十二軍に対する補給は台湾から実施するほうが有利、によるものだった。

七月十一日付で大本営は、第三十二軍を防衛総司令官から台湾軍司令官の隷下編入を命じ、「防衛総司令官ノ防衛担任地域ト台湾軍作戦地域トノ境界ハ北緯三十度十分ノ線トス」とした。北緯三十度十分といえばちょうど吐噶喇列島と、屋久島、種子島、口永良部島の大隅諸島とを区切る線である。日本政府および日本軍にとって、本土の概念がおよそこの線であることが、防衛地域と作戦地域の分けかたからうかがえる。

第三十二軍には六月下旬以降さらに、第九師団(満州から七月中旬上陸)、第二十四師団(満州から八月上旬上陸)、第二十八師団(満州から八月中旬、宮古島上陸)、第六十二師団(北支から八月中旬上陸)、独立混成第五十九旅団(満州から九月中旬、宮古島上陸)、同第六十旅団(満州から九月中旬、宮古島上陸)、同第六十四旅団(広島から八月中旬、徳之島上陸)など編入された。すでに編入されていた二つの旅団は、第四十四旅団が沖縄本島、第四十五旅団は石垣島に配置されていた。八月八日、第三十二軍司令官は渡辺正夫中将から、牛島満中将に替った。これは渡辺中将が過労で倒れたので、かつて杭州湾上陸作戦に従い、〝田家鎮激戦の猛将〟といわれ、陸軍士官学校校長だった鹿児島県出身の牛島中将(死後、大将に昇進)は、八月十日那覇に到着した。参謀長は長勇少将が七月八日に就任しており、関東軍総司令部付だったのがサイパン奪回作戦のため大本営に招かれ、この作戦が中止になったので、第三十二軍援助のため沖縄派遣になり、そのまま参謀長になったのである(一九四五年二月に中将昇進する)。

師団四、混成旅団五が第三十二軍の兵力だったが、十一月十七日付で第九師団が抽出され、台湾に移動することになった。これは、レイテ決戦のため、兵力をフィリピンに集中する大本営の方針にも

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com